

沖

俳句雑誌[おき]

4月号

沖 発行所

雪間風

能村 研三

俳句の本の収蔵

先日、俳人協会の改革検討図書委員の一人として、俳句文学館内の各フロアーの施設見学をした。まずは文学館の心臓部とも言える地下二階の書庫へ移動。ここは中二階構造になっていて下の階は句集などの書籍、階段を上がった階には各結社から送られて来る俳誌等が手動式書架に収蔵されている。父登四郎の全ての句集、書籍や私の句集、沖の刊行句集もしっかり収蔵されていて安堵する。また俳人協会以外の方の句集等も収蔵されているので、ここに来れば全ての俳句資料はカバー出来る。俳句雑誌の書架には、「沖」をはじめ、隔月、季刊のものも含めて各誌ごと年代順にきちっと収蔵されている。図書室で閲覧を希望すると、係の方が地下まで降りてとってきてくださるのだ。毎月の背表紙を重ねていくと富士山の絵が浮かびあがってくる。凝った雑誌もあって楽しい経験をした。

雪間風波郷旧居を探し当て

ホツチキス分厚きを噛み三月へ

独酌に似合ふや走独活噛みて

潭身の闇もて開く白辛夷

青 鰻 や 少 し あり たる 拗 ね 心

シ ナ リ オ の 序 破 急 読 み て 臚 濃 し

啓 蟄 や 馴 染 み し 靴 の 不 恰 好

春 雷 や 代 筆 楽 譜 眠 り を り

独 活 サ ラ ダ 心 の 澱 を 沈 め を り

か さ ば り し 帽 子 の 箱 や 彼 岸 寒

現在の句集等の蔵書数は約五万四千冊、俳誌等は約三十三万一千冊、この他に外国語の句集や俳誌も收藏されており、受け入れ可能な蔵書の限界はあと十年分位だそうで、今からの計画的な対策が迫られている。この後は三階の展示室へ。ここは、通常は頼んで鍵を開けてもらわなければならないのがやや面倒である。俳人協会にゆかりの先人の方々の写真や、揮毫色紙等の貴重な資料が展示されていて、登四郎や翔のものも数点ある。委員からは、結社内の記念展示などに貸し出して積極的な活用を図つたらという声も聞かれた。

こうした施設は、他に岩手県北上市の詩歌文学館などがあるが、川市の文学ミュージアムにも出来る限りの句集や雑誌を収めようと、私に寄贈を受けた本はこちらで收藏してもらっている。しかしこちらの方も限界がある状況である。

四月からは、公務が無くなるので我が家の書庫の整理に着手して、もっと活用できるようにしたい。

蒼茫集



手遊び

田所節子

待春や花屋は水を走らせて
耀いてゐる凍滝の力瘤
冬ざれの溪に湧きつぐ日の出靄
人波のかぶさつてくる追儼かな
春雪の渦巻いて降るビルの谷
東京に雪佐保姫の手遊びか

仮の世

荒井千佐代

ふるさとの水音潮の香小晦日
狐火を見むと浜石積み上げて
凍曇り落暉の日矢は天を射る
別れ来て機内膝掛け重ねかけ
死ぬ力日々たくはへむ水雲喰ふ
仮の世を生きる海鼠もわたくしも

薄ら陽

森岡正作

どかと来てますらをぶりの春の雪
薄ら陽を乗せ薄氷の浸水す
酒蔵に入ったきりの探梅行
屋根をゆく恋猫にある闇の地図
初陣の牝馬荒ぶる春の土
小渦みな笑窪となれり水の春

滑る男

秋葉雅治

瀬戸内のさ揺らぎもせず牡蠣筏
一人づつまたぐ春泥高層下
打ち寄する異形の岩の彼岸潮
雪をんな滑る男に魅せられて
恋猫の闇に溶け込む野性かな
きさらぎや白の艶めく茹で卵

片耳輪 千田百里

狐火を一喝したるクラクシヨ
何色ならむ藍瓶に張る薄氷は
春の野は風の子たちの滑走路
亀鳴くや幾つも溜る片耳輪
しまく・しづるよ春雪のあなどれず
節忌の春雪蹴つてくる日ざし

臥しをれば 楠原幹子

開かるる真紅の手帳冬薔薇
凍蝶のいつの間に向き変はりたる
合せ酢の匂のこもり春の雪
建国日蛇口の向きを正しけり
梅かをる毛筆書きのお礼状
臥しをれば音のこまごま春障子

外は雪 大川ゆかり

真夜中のモノクロ映画外は雪
冬すみれ一人暮しにあこがれて

初春や乳白色の湯に浸かり
初風や臉に受ける日のぬくみ
花束を言葉代はりに春の雪
遠きほど散る海光や春浅し

貨車の馬 甲州千草

冬林檎また丈伸びる子の寡黙
寒晴や風向計の上機嫌
眼をつむりゐるか寒夜の貨車の馬
足首の掴まれさうな氷点下
木の橋をきゆつと鳴かせて春待てり
御中を書くに消す文字余寒なほ

寒 晴 吉田政江

大吉と出て初御錢信じけり
初喧嘩しぶしぶ夫に譲りけり
雪催ひ厚焼き卵うら返す
試験日のお清めほどを雪降れり
富士山が見えて探梅忘れをり
寒晴祝金福一撰や受賞の報せ弾みくる

逆さ文字

菅谷たけし

枯櫛 天へ寡黙を通しけり
日陰霜宝の隠し場所めいて
蒸籠噴きぬる春節の逆さ文字
針供養指のきれいな男かな
魚河岸をかたまつてゆく新社員
君のは交遊二十年播磨より京都ずなき田起しの遠き影

だいたい春

辻美奈子

珈琲の湯の沸く音の四温かな
四捨五入すればだいたい春ならむ
にこにこと来てふきのたう見て帰る
薄氷にびしりの音の跡ありぬ
春月や子の全身のよく撓ふ
春の雨なり下町の芳しき

希望のかたち

望月晴美

雪搔きす白にとてつもなき重さ
つつ抜けの空へ総立ち冬の山
大寒ときけばおもはず身にちから
波音を封じ流水青みけり
芽吹くもの小瓶にさして山の宿
天を指す希望のかたちこぶしの芽

併走貨車

松井志津子

真綿色睡りに色のありとせば
雪載せし併走貨車の岐れゆく
蠟涙のつつと三寒四温かな
湖明けて飛白模様に鴨白鳥
遅れじと助走短く子白鳥
語り合ふやうに雲ゆく春隣

大試験

広渡敬雄

独楽澄みて白き山々撥ね返す
風花や海底鉞に降りる貨車
枯菊の残りし色も焚き尽くす
波の花重なりあうて飛びにけり
轍より水滲みけり大試験
探梅や駿河湾より雲の来て

早春

宮内とし子

山河いま薄墨色に春を待つ
人日の音断つ路地のもんじや焼
早春の茶房のドアの鈴鳴れり
波郷の地波郷語りてあたたかし
吉祥天おん顔若し春の色
シーソーの均等のまま残る雪

春の雪 林昭太郎

海光に力こぞりて冬木の芽
薄氷の裏側の泡つながりぬ
村中の犬に吠えられ探梅行
着陸のバウンド枯を深めけり
春立つやにはかに近き隣家の灯
古書店に古書の匂ひや春の雪

小名木川 鈴木良戈

霜晴れや町を貫く小名木川
鶯替への列曲がりつつ進みけり
錠剤の舌に溶けたる小春かな
柎を刺す星空の医家の門
天窓に陽射し溢るる建国日
繋がれし子供ボートに春の波

つらら 大畑善昭

退くと見せまた攻めて来る冬將軍
雪を掻く筋骨のまだ衰へず
昼月の色づく頃の大つらら
一雨づつ春へと草木国土かな
某所にて一事くはだつ菜の花忌
磨かれて馬のあをを三月へ

立春初雪 上谷昌憲

寒波来る都庁に千のガラス窓
運び出すピアノ水仙踏まぬやう
日脚伸ぶ鳥のこゑ出す信号機
病院の空中廊下日脚伸ぶ
天気予報まづカトレアを大写し
立春初雪齒科医の椅子に仰臥して

雁供養 河口仁志

鷹柱一羽外れたる歪みかな
冬蝶の生き抜く鼓動ありにけり
眠気すぐ誘ふ点滴雪もよひ
生ぎるとはただひたすらに冬木の芽
羞ぢるとも媚びるともなき冬桜
瓦礫まだ残る浜辺の雁供養

期待 淵上千津

真夜どよもす飛雪や衿を正したり
飛雪払へば裾は吹浦の砂まじり
アスリートに期待の重さ春深雪
春雪の習ひや夫の祥月忌
雪しづり詠めば余命の軋みけり
もの取るに立つより蹙る余寒かな

潮鳴集

集中力 内山花葉

鷹の眸のふはりと飢ゑて水面打つ
乗鞍の峻峰染めし寒茜
一の蔵より春はな色の大吟醸
乗りてくる黙の塊受験生
冬牡丹集中力の珠なせり

タイミング 栗原公子

淋しさの正体冬の薔薇に棘
風花や握手をほどくタイミング
胸中に一語のぬくみ雪催
春浅し夜光時計の遅々として
着ぶくれてとろとろ溶ける記憶力

また屈む 菊川俊朗

冬三日月動けば斬られさうな夜
火の匂ひ残してよべの狐とも
甕底に青空のあり寒に入る



大寒や餅は山へ行つたきり
日脚伸ぶ道草の子がまた屈む

うすみどり 佐々木よし子

初釜や和菓子の餡のうすみどり
冬深し豆ぐつぐつと煮つめをり
シヨベルカー仕事始めの川に入る
太陽の下の団欒福寿草
山門の弾痕しるし梅ひらく

海鳴り 佐久間由子

初蝶や湖のひかりを紡ぎつつ
荒磯に日矢のたばしる成人祭
金柑の甘くて青き味したり
海原にこぼれんばかり冬銀河
海鳴りを遥かに涅槃し給へり

沖作品



能村研三 選

初春や笹の調べは天翔る

東京

平松うさぎ

春立つや普賢菩薩の白い象

地球といふ乗合舟や隴なり

春立つや人魚ゐるてふ波の底

野は萌黄そして桜を待つばかり

日輪の只中にゐる冬の猫

追羽根の空より戻ること早し

正月の朝の太陽よき匂

北国に雪掻きだけの暮しあり

古本屋迎春淡き灯をともし

あらたまの年や硯池の青あをと

戸障子の隙に育空初寝覚

氷点下十度が何さ冬すみれ

ねんねこにはづむ嬰の手遠嶺晴

とりどりの土鈴ミアソラ四温かな

岩手

吉川 隆史

長野

植村 一雄

人日の等身大の鏡かな

千葉

多田 文子

崖氷柱風の豎琴とぞ思ふ

喫茶去に膝を寄せたる雪しぐれ

橋脚の水かげろふや寒明忌

春隣あけぼの色に透く卵

拍手の二つ目強き初詣

数へ唄忘れ手鞠も止まりけり

大粒の星大寒と思ひけり

鴨の子にみるみる雨の水輪増ゆ

大仏の掌にくつるぐや春の雪

これよりの出会ひと別れ実万両

酷寒の井戸の竹蓋ゆるびあり

小寒や雲いきいきと奔りをり

裸木の雄姿畏るる古利かな

埋火の熾るほむらの色動く

東京

山下ひろみ

長崎

福山 和枝

沖作品 15句選評

*
能村研三

れが現実でなのであろう。

氷点下十度が何さ冬すみれ 植村 一雄

前句と同じように、今年の寒さを詠んだものだが、全国的にも寒い日が多かった。植村さんがお住まいの茅野は寒天つくりなどでも有名だが、茅野市一帯は諏訪湖の東側で、とりわけ寒さが厳しい地域である。諏訪湖が氷結するくらいであるから、ときには、氷点下20度前後まで下がるときもある。「何さ」は自分に言い聞かせている言葉で、冬すみれは極寒の中でも芽を出し花を咲かせる。

人日の等身大の鏡かな 多田 文子

私の句集『磁気』に収められている句で〈卒業子等身鏡より出発す〉という句があるが、等身大の鏡は家の中のどこにでもあるわけではない。お正月は和服など正装して出かけることが多く、姿見として全身を映す鏡が必要だ。「人日」は五節句の一番目の節句で、一年の豊作と無病息災を願う日。鏡に等身の自分を映し、幸先の良いスタートをきった。

大粒の星大寒と思ひけり 山下ひろみ

大寒の頃は一年で一番寒さの厳しい季節、冷たく凍えた夜空には、冬の星座が煌々と輝く。その輝きぶりも普段より大粒に輝いているように見えた。奥坂まやさんの句に〈大寒の星ことごとく眼持つ〉という句があるが、大寒という冷たい空気の中では、一層の光度を増して輝く。(以下略)

地球といふ乗合舟や朧なり 平松うさぎ

地球のとてつもなく長い歴史の中にあつて、一人の一生などは、ほんの微細なものに過ぎない。そんな今の時期に地球という星に乗り合わせている人口は72億人いるそうで、今世紀半ばには90億人に達するという。現代は宇宙船から地球を眺めることも出来るので、地球自体が朧の中にある一つの乗合舟のようにも見える。世界各地ではまだ紛争や戦争が絶えないが、たまたまこの時期を同じく地球の乗り合わせたもの同士と考えれば、もつと仲良くしなければならぬ。

北国に雪掻きだけの暮しあり 吉川 隆史

今年は何首都圏でも大雪が降って、普段慣れない雪掻きに往生したが、北国の人たちにとつては、こんなことは日常茶飯事のこと。何事を始めるにも家の前の雪掻きをしなければ始まらない。老若男女全ての人が雪掻きをしなければならない宿命にある。「雪掻きだけの暮し」はややおバーかも知れないが、こ